

第28号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十七年十一月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしずく

石川希理

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉はいのちである。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験を必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがって、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」「心に響く」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型（詩・短歌・俳句・川柳など）、散文（小説・随筆・児童文学・紀行・評論など）のすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力、援助を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス代表 大西玄一郎



目次

梅崎春生の海 「前編」 小野村 新 1

サンサーラ 石川希理 11

「車谷長吉さん 地元の思い出」 塩見伸介 13

阿倍野友之・石川希理対談 文明論 死から生へ 14

少年時代 大西隆史 31

がんセンター 石川希理 38

遅れた盆帰り 高阪博一 50

悲哀 明花 63

編集室から 66

梅崎春生の海

小野村 新

なんと不安定な格好なんだ！ 梅崎春生の文学碑を見て、里見はそう感じた。「人生幻化に似たり 梅崎春生」と刻まれた大きな自然石が、御影石を無造作に組んだ台石の左方向に大きくはみ出しており、何かの拍子にゴロンと転がり落ちそうである。全集の口絵写真がそれほど不均衡な印象を与えなかったのは、左斜め前方向から撮ったためであろう。里見は裏に回ってみた。大きくて頑丈そうな石柱が、自然石をバランスよく支えている。なるほど、これなら転がり落ちる心配はない。それにしても、もう少し均整のとれたものにならなかったのか。

枕崎からの途中、耳取峠に建っていた八田知紀

の歌碑は、大きな台石の上に扇形の白い御影石を配した左右対称の瀟灑なもので、梅崎のものはそれとは大きく隔たっていたのだ。しかし、これは意図的に設計・制作されたのであろう。梅崎の人物と作品を象徴してのこの形としか考えようがない。そびえ立つような造形の堂々たる文学碑など建てたら、梅崎が照れて、やめてくれよ、と言いついである。もつとも、梅崎は文学碑の建立など、望みもしなかったであろうが。

ガイドブックには「海を見下ろす丘に立つ」と紹介されていたので、もつと開けた展望を想像していた。しかし、海は松林に遮られて、背伸びするとわずかに見える程度である。なぜ、見晴らしのいい耳取峠に碑を建てなかったのか。この耳取峠からの真夏の海の光景は『桜島』や『幻化』の重要なモチーフであるというのに。

里見は文学碑を数枚カメラに撮り収めた。文学碑の傍らに自分もと考え、自動シャッターをセット

してカメラの置き場所を捜していると、夫婦らしき二人連れが丘への道を上つてきた。男は六十歳くらいで、この暑さなのにジャケットを着、ネクタイまで絞めている。少々腹は出ているが長身でほっそりとしており、その体型に似合った細長い顔に黒縁めがねをかけている。

女性も、里見と同年配の四十台半ばといったところか。男とは対照的にでっぷりと太っており、水色のワンピースにつばの広い帽子をかぶっている。薄い色合いのサングラスを外ししきりに汗を拭いているが、里見の姿を認めると、驚いたような表情で一礼した。

男の方が気を利かせて言った。

「お撮りしましょうか？」

ずいぶん、かん高い声である。お尻を突き出すようにしてカメラを構えた中腰の姿勢から、カマキリの姿を連想して里見は吹き出しそうになったが、かううじて我慢した。

里見は、文学碑の横に立つてカメラに収まった。写真を撮りおわると、カマキリ氏が訊いてきた。

「梅崎春生がお好きなようですね。『桜島』は、私も読みましたよ。二十歳の頃に。内容はほとんど忘れてしまいましたかね。そうそう、耳のない娼婦の話がでますよね。それからおじいさんが首つり自殺をするところを、双眼鏡で見ている場面とか、まだうすうすとは覚えていますよ。ところで、人生幻化に似たりというのは、梅崎春生の言葉なんですか？」

「この言葉は中国の詩人、陶淵明の漢詩の一句なんです。梅崎がとても好きな言葉だったらしくて、色紙なんかにはこの言葉を書いたそうです」

「人生幻化に似たり、か……。それにしても、何もない所ですね、この辺りは。枕崎があんなにさびれた街だとは思いませんでしたよ。ハウステンボス、行かれましたか？ よかったですよ。まだでしたら、ぜひお行きなさい」

大儀そうに、あごに流れ落ちてくる汗を拭きながら、婦人がうなずいた。

里見が鹿児島に着いたのは、昨日の夕刻であった。六時だというのに、ずいぶん蒸し暑い。路面を走る市電、色とりどりのバス。それらが縦横に走って、にぎにぎしい。天文館の大通りに立ち並ぶビルの中でもひとときわ目立つ白亜のデパートの前で、大学生がワーワーやっている。何かの試合の祝勝会の帰りののか。歓声が、夕日の街に響く。行き違う人々の表情が生き生きしている。すべての人々が微笑をたたえているのである。この大らかな活気はどこから来るのか。大阪や神戸にはない何か、ここにはある。

ホテルに荷物を預け、小一時間天文館の繁華街をぶらつき、里見は「さつま路」に入った。ガイドブックで目を付けていた店である。

薩摩料理をつまみながら、お湯割り焼酎を飲ん

だ。会社の同僚、家族連れ、アベックなどがそれぞれテーブルを囲んで談笑している。中には旅行者らしき人もいるが、里見のようにひとりで飲み食いしている者は見あたらない。そんな中で飲む気分というものが、旅愁を伴った孤独感をもたらし。しかし、酔うほどにそのような感情もゆるまり、思い切つて来てよかつた、という満足感が心地よく酔った体に行き渡つた。

夏季休暇の三日前に突然鹿児島へ行くことを告げたため、妻は怪訝な顔つきで訊いた。
「変な人やねえ。どうして急にひとり旅なんか思いついたの？」

里見の夏の休暇はこの数年、ごろ寝にテレビ読書と決まっていたのだ。暑さの苦手な彼の外出先といえば、映画館くらいに限られていた。

「前から行きたかつた所なんや。新婚旅行で徳之島へ行ったやろ。友だちと沖繩にも行つたけど、鹿

児島はいつも素通りやつた……。桜島を見たいんや」

文学になど全く関心のない妻には、里見が一家の小説の舞台に惹かれて鹿児島へ行くなどということには、思い至らない。里見もそれについては触れずにおいた。

「七月三十一日の夏祭りまでには帰つてきてね」

自治会の仕事が多たつてから必ず、と念を押しながら、妻は了承してくれた。

里見は、独身時代に一度だけひとり旅をしたことがある。二泊三日の、あてのない能登への旅であった。若い頃のひとり旅というものは、妙に屈折した感情が伴うものである。ある種の背徳感のようなもの、何かおもはゆい、動く自分に周囲の人々の視線が注がれているような……。

今度は違っていた。四十四の中年男には、梅崎春生の小説の舞台を訪れるという明確な旅の目的があった。背徳感などとは、無縁の旅である。

「そろそろ、下りましようか」

カマキリ氏は歴史民族資料館を見たいらしく、先頭に立つて歩きはじめた。その後奥さんが続いた。丘の登り口に据えられている「梅崎春生の文学碑この上にあり」の案内石碑の横で、オールバックの白髪を整えながら、カマキリ氏が尋ねてきた。

「いつまで鹿児島におられるんですか」

「あと二、三日です」

「台風には気をつけてくださいよ。二、三日後は、飛行機飛ばないかもしれませんよ。それじゃ、お元気で」

台風五号が大隅半島を北上しており、薩摩半島への影響は少ないと今朝のテレビが報じていたのを思い出した。

丘の下休憩所でコーヒーを飲んだ。眼下に双剣石があった。想像していたよりも小さな二つの岩が、薄い夕日を浴びて並び立っている。何の変哲も

ないこの海の夕景が強い感慨を伴って心に迫ってくるのは、作品の中ですでに見ているからだ。風景とは、そういうものなのだろう。

双剣石を間近で見るために里見は海岸へ出た。双剣石は『幻化』に記されているとおり、一キロメートルほど先にある。

夜の海をアルコールを飲んで泳いだ五郎たち。その時に、奄美大島出身の福という名の兵長が心臓麻痺で死んだ。五郎が死んでも、決しておかしくなかったのだ。倦怠と虚脱感が支配していたあの海。そして、あの時代。それを、梅崎は描いたのだ。

宿泊先の寺田屋まで歩く途中に、坊泊小学校に立ち寄った。『幻化』の内容を思い出しながら里見は歩いた。海辺特有の夕暮れの青い大気が、里見の心を和らげた。ほぼ『幻化』の記述どおりであるが、校庭から双剣石は見えなかった。また、十メートルとある二基の仁王石像間の距離も五メートルほどしかない。このあたりは、梅崎の創作なので

あろう。

寺田屋の十数軒手前に倉浜荘があった。『幻化』にも登場する。その昔、密貿易に使われたというが、ふつうの民家と別段変わった造りでもない。里見は、雨戸の隙間から中をのぞいてみた。薄暗い廊下の向こうにぼんやりと障子が見えた。のぞき見をしている里見の背後で、声をかけてきた人がいた。驚いて振り返ると、六十がらみの女性が立っていた。隣家の主婦らしい。里見が何も訊いていないのに、いろいろと説明してくれる。

「ここはもう、空き家同然なんですよ。三年前に、息子さんが鹿児島市内にりっぱな家を新築されましたね。それまでは、釣りやら海水浴やらの宿泊客でにぎわっていたのですが」

里見は、五郎が福の棺に入れてやった花のことを尋ねてみた。

「ダチュラという花をご存じないですか」

「はい。あの木なら確かこの辺に……」

主婦は庭の植え込みを捜してくれたが、その木は見つからなかった。

「この庭の植え込みも、ずいぶん整理されましたからねえ。その時に伐つてしまわれたのかもしれない。でも、あの花の匂いはなにか吉な感じで、気持ちのよいものではありませんでしたよ」

寺田屋は古い造りの旅館であつた。食堂の壁には、さまざまな写真や色紙が貼つてあつた。「遠くへ行きたい」のロケで宿泊した伊丹十三や工藤賢太郎の写真や「さつま白波」のカラーシヤル撮影で宿泊した小野寺昭の写真などがある。それらの中の一枚に「幻化」という文字を見つけ出した。高橋幸治や太地喜和子の名前が見える。その色紙をしげしげと見つめていた里見を見て、主人が往時を懐かしみながら説明してくれた。

「ああ、その色紙ねえ。梅崎春生の『幻化』という小説がテレビドラマになりましたね、その撮影でたく

さんのスタッフが泊まったのですよ。あの時はほんとうに楽しかった。高橋さん、泳げませんでね、水泳の特訓を受けたそうですよ。太地さんも若々しかった。ほら、そこにあるでしょう。一九七一年、昭和四十六年と。もう二十年以上も前のことですね」

高橋幸治が五郎を、太地喜和子が娼婦に扮したのであらう。それでは、丹尾は誰が演じたのだらう、などと思いを巡らしていると、『幻化』のラストシーンが脳裏に大きく描き出された。雄大な阿蘇のシーンだ。五郎は丹尾と、丹尾が火口を一周する間に、飛び込むかどうかの賭けをする。このやりとりがおもしろい。二人は賭けの帳尻を合わせるために四枚の一万円紙幣をまっ二つに切る。半分ずつを分け持つていれば、賭けは公平に為されるというわけである。

「いつしよにつなぎ合わせれば、四万円として使える、そうでしょ。飛び込めばバアとなる。逃げ出して

も、ぼくはこれを使えない」

「半分あれば、日本銀行に持って行くと、一枚として認められるんじゃないかな」

「冗談でしょう。半分が一枚に通用するのなら、世のサラリーマンは自分の月給をじよきじよき切つて、二倍にして使うよ」

この会話のところで、里見は笑つてしまったものだ。自殺の賭けをしている男たちのやりとりとは思えないからである。紙幣を半分に切る、この種の奇抜な着想は梅崎の小説にはよく登場する。『Sの背中』での将棋の持駒を売り買いする話や、庭に勝手にさまざまな木を植えていく『植木屋』の話やら。

この人の目は、いつたいどこについているのか。視点がユニークなのである。奇抜といえ、ば、「僕」と野呂との奇妙な同居生活を描いた『ボロ屋の春秋』など最たるものであろう。次のような一節がある。

——僕は生まれつき相当のオセツカイ屋で、他

人との関係にもこれなくしては入れなかった。でも、おおざっぱに言えば、人間と人間とを結び合うものは、愛などというしゃらくさいものでなく、もっぱらこのオセツカイとか出しやばりとかの精神ではないでしょうか。大づかみに僕はそう了解しています。オセツカイこそが人間が生きていることの保証であるという具合にです。——

遠藤周作は、この「おせつかい」による被害者であつたらしい。遠藤の方も梅崎のいたずらを楽しんでゐる趣もあり、そのあたりがおもしろい。いじわるをいじわると思わせない、むしろそのことで、親近感が増す。そういった憎めないいじわるをできる人はそう多くはないであらう。

翌日は朝から激しい雨が断続的に降つていた。里見はタクシーで枕崎まで行き、折よく停車していた知覧行きのバスに飛び乗った。乗っている間小康状態だった雨は、知覧に着くや激しさを増してきた。

特攻平和会館の中央部に、特攻機「飛燕」の実物が置かれ、周囲の壁に遺影や遺書などが展示されていた。多くの人が身を乗り出すようにして見入っている。モノクロ写真の遺影が荘厳な雰囲気をもし出している。辞世の歌が毛筆でしたためられている。それを、メモ帳に写している人もいる。展示会場を一巡して、次の目的地へと考えるが、雨は激しく、止む気配すらない。外出をためらっていると、アナウンスが流れた。

「ただ今より、川内純心女子高等学校ハンドベル部鎮魂演奏会が開かれます」

そういえば、会館ロビーの案内掲示板に紹介があった。ハンドベルとは、どんな楽器なのか？ 雨止みを待つのにちょうどよい時間つぶしになると考えた里見は、演奏会場へ足を運んだ。

会場にはすでに百人ほどの聴衆が集まっていた。舞台に整列した女子生徒の前のテーブルに大小

さまざまなハンドベルが置かれている。ハンドベルな楽器を、里見はじめて見た。

館長の挨拶に続いて、顧問の安楽晃先生がハンドベルについて説明した。ミッシェンスクールにふさわしい上品な喋り方をする人だ。

安楽先生が話しはじめるのと同時に、中央の女子生徒が両手にハンドベルを捧げ持った。釣り鐘を逆さまに持った格好である。白い手袋が印象的である。

「ベルの中に振り子状のクラッパ（舌）がついていて、それがベルの内壁をたたき音を発する構造になっています。左手で低い音のベル、右手で高い音のベルを持ちます。ベルを少し後方に傾けて音を鳴らす準備をします。腕をリラックスさせ、手首のスナップを効かせて、ベルを鳴らします。ベルのコントロールは、手首のスナップを強めに効かせると、ベルは大きい音を出します。弱めのスナップは、やさしくやわらかい音を出します」

安楽先生の説明にそつて、女子生徒がハンドベルを演奏した。

「腕を動かしてつづけてください。前へ円を描くように、そして、もとのポジションに戻します。ベルが円運動をしなければ音は響かず、硬い音になってしまふのです。音はベルの口からではなく、ベルのサイドから響いてきます。ベルを止める時は、ベルの縁に肩を当てます」

なるほど、涼やかな音だ。しかし、ちよつとたよりない音だな、と里見は感じた。ハンドベル演奏はチームワークでもあります、といういかにも教師らしい言葉によつて、安楽先生はその説明を終えた。

二列に並んだ十七人の両手にハンドベルが握られ、安楽先生の指揮で演奏がはじまつた。第一部は、バロック名曲集。大きな腕の動きは大きな円を描き、小さな腕の動きは小さな円を描く。せわしい腕の動きあり、ゆつたりとした動きあり、大小とりどりのハンドベルが、さまざまな音域を奏でるのだ。

時にはベルを持ち替えたり、テーブルをトントンたたいたり、クラッパを直接手で弾いたり、三十四個の銀色の鐘が上下し、交差し波を描く。音は連なり、重なり合いながら流れるように続き、層を成す。

演奏を聴いた時、里見はエレクトーンか何かの電気音による伴奏者が居るのではと思ひ、辺りを見回したほどであつた。二個のベルではあれほどたよりない音色であつたのに、三十四個になると、これほど厚みのある豊かな量の音になるのだ。生で発せられた小さな音の集積が、電気音となつて聞こえてくることの不思議。里見は陶醉して聴き入つていた。

演奏は、第二部が「ポピュラー・ナンバー」、第三部が「日本のうた」、第四部が「クラシック名曲集」と続いた。静かな曲からアップテンポの曲まで、生徒たちは一生懸命に演奏した。J・シュトラウスの『ラデスキー行進曲』を最後に、一時間の演奏が終

了した。聴衆は、惜しめない拍手で演奏に応えた。里見の後ろの座席で、「鐘は平和のシンボルなのよね」と子供に話している母親の声が聞こえてきた。

演奏会場を出て、特別展示場へ向かった。雨は依然として激しく降っている。総ガラス張りの特別展示場から見ると外観は、すさまじいほどである。

排水溝の水が行き場を失い、正面玄関のコンクリートの歩道が傾斜にそって早瀬のような流れを造り、その向こうには池状の水たまりがあちこちに生じている。その上を、これでもかと容赦なく大粒の雨がたたきつける。篠突く雨に耐えるかのような特攻兵士の銅像が不動の姿勢で直立しているのが見える。すべてをあきらめさせるように降る、気の遠くなるような雨。

——これが知覧の雨なのか。

異郷のどしゃぶりの雨の情景に圧倒されて、里見は呆然と立ちつくしていた。

〈前半終わり〉



★梅崎春生
『桜島』執筆の頃（昭21年）
講談社文芸文庫より

サンサーラ

石川
希理

白梅色の光が吹き抜ける

けしいろの風が結晶となって碎ける

刻はトラデイションに乗って流れ

青春のきらめきは

風となって

永劫の旅路に 寄り添う

あなたの

風待ちの坂よ



友よ

師よ

風待ちの丘よ

坂の風はあなたの心に屈み込み

回帰の果てに

虚空のいのちとなる日にも

またそつと寄り添うだろう

〔梅花女子大・風待ち坂第三集〕

※〔注〕

サンサーラ・・・回帰・輪廻
トラディション・・・伝承

「車谷長吉さん

地元の思い出」

無職 塩見伸介（兵庫県65）

兵庫県姫路出身の作家、車谷長吉氏が17日に亡くなりました。車谷氏の作品には姫路の地名、懐かしい方言や独特の言い回しなども多く、姫路に近い宍粟市出身の私は親近感をもつて愛読してきました。

三島由紀夫賞を受けた『鹽壺の匙』。その気迫溢れる文章には圧倒された。衝撃的な私小説であった。くしくも主人公の叔父である「宏之兄ちゃん」が

亡くなった5月22日と5日しか違わない、新緑の季節に逝かれたことには、何か因縁のようなものを感じる。エッセーにも、氏独特の文学観やユーモアに裏打ちされたシニカルなものの見方が横溢しており、印象深いものが多かった。

2007年の秋に姫路文学館で開催された「作家車谷長吉。魂の記録」展の際には、哲学者の鷲田清一氏との対談も拝聴できた。直木賞を受賞した『赤目四十八瀧心中未遂』の単行本の扉にサインもしていた。一字一字丁寧に名前を記し、しっかりとした手つきで落款を押してくださった様子が、昨

日のことのように思い出される。穏やかな印象だった。

病氣療養中だったが、快復して作品を書き続けてほしかった。ご冥福をお祈りするばかりである。

〔朝日新聞「声」5月22日〕



車谷長吉（くるまたに ちようき）（1945年7月1日ー2015年5月17日）。作家、随筆家、俳人。姫路市飾磨区出身。慶応卒。直木賞（1998年上期）『赤目四十八瀧心中未遂』他受賞・69歳寂

「阿倍野友之・石川希理対談」

本日のテーマは、文明論の3回目、「死から生へよりよい生き方について」です。

7月7日居酒屋にて

石川 前号のお話ですが、読者の方から難しくて斜め読みした、というお便りがありました。

阿倍野 相当わかり易くを心がけたつもりですが、そうですか。

石川 やはり、形而上の哲学的な話題ですので、よく休んで相当頭を酷使しないといけないようです。

阿倍野 そうですね。「死んだらどうなる」というお話ですが、キリスト教やイスラム教、大乘仏教では、はっきりしているか、それとも曖昧かですので、お釈迦様の「仏法」では、理論的になりますからね。

石川 それはどういふことでしょうか。なんとなく判る気はするのですが。

阿倍野 キリスト教では、新教と旧教などによつて少しずつ異なりますが、死は最終的な死ではなく、復活して最後の審判を受け、天国か地獄かに行つて、それで終わりです。イスラム教もほぼ同じです。共通しているのは魂という固有の我があること。阿倍野友之という魂が肉体から抜け出していきます。日本の神道などでもそうですね。神になるという教えもあります。古事記では黄泉国という地下の国が出てきます。大乘仏教はいろいろですね。南無阿弥陀仏で、阿弥陀仏のお迎えがあり浄土へいつて修行して、この世に帰ってくる。ここにも阿倍野友之という固有の我がありますね。ただ、行つて帰るといつてもどんな形なのか具体的に

には不明です。南無妙法蓮華経は、唱えると善処に生まれます。靈山浄土ともいいますが、この世がイコール浄土であるという考えもあります。個人の命は、大宇宙の命に溶け込み、いろいろな縁によつて、再度この世に生まれ出る、原動力は生きて来て作り上げた業です。その繰り返しが永遠に続いていく。やはり個人の命というのがあるのでしょうか。阿倍野友之の命です。禅宗は修行で悟りを開くことですので、「死後の世界」や輪廻転生については認めるとも認めないともいいません。その立場は形而上学的な議論を避けられたいお釈迦様と同じです。ただ、座禅を始め真言宗でいうような「止と観」の瞑想はわれわれには実行することはもの凄く難しい。まず不可能だと思います。

石川 神が総てを造られたという一神教などでは単純ですが、大乘仏教は難しいですね。

阿倍野 お釈迦様の教えがどんどん拡大していきましたからね。宮元啓一先生は「肥大化した『全知』と肥大化した『慈悲』」といわれています。お釈迦様が神様のような「全知全能」者、「救済」者になつてしまいましたが。いろいろな仏さまもそうですね。お釈迦様は亡くなる前に「自灯明・法灯明」といわれていますね、「真理を拠り所に自分がしつかりしなさい」といわれています。『マハーパリニツバーナ・スッタタ』という、大般涅槃経ともいいますが、後からいろんな『（大般）涅槃経』ができましたから通常はパーリ涅槃経といいまして、そこにあります。つまり神やいろんな仏さまは出てこないのです。生きている自分が悟りなさい、その意味では禅宗と同じですね。

石川 大乘、ことに日本の場合は平安末期から鎌倉期にかけて、いい方は悪いですが、泥仕合のようになっていた。

阿倍野 まあ、末法思想が流行して、暗い世の中でした。それに一般の人は教育を受ける機会はなかった

から、簡単明瞭、これが最高で、こんなに簡単に救われるという教えが広まったのでしようね。相互に批判して拡大していく。真言・天台などの旧仏教、禪などは難しい。お釈迦様の基本的な教えも強烈な自己責任です。本当はシンプルなんですが、相当概念的な理解ができないと判りにくい。また殺し合いや、明日もわからない世界では手つ取り早くない。でもやはり誰にでも理解出来るようにしないといけませんね。現代は幸いなことに、みんな教育を受け、平和でしつかりと考える時間も余裕もある。それでも難しい、というより、自己改革なんてシンドイですから逃げてしまうのですね。しかし、しんどくないわかり易いということを伝えられるように、この対談もそう努力していきましょう。お釈迦様は対機説法といつて相手の機根に応じて話をされた。機根というのは性質・性格・状態といつていいでしょうか。病に応じて薬を与えたという意味で「応病与薬」ともいいます。だからわかり易いのです。私たちは一般論として話をしています。しかし、やはりよくわかるように努めましょう。何処までできるかわかりませんが。

石川　ありがとうございます。アクトス通信には、興味を持っていただいて、お便りをくださった皆さまの感想を掲載しております。お会いしていろいろとお話いただいた方もおられました。ではさて、いよいよ生き方についてです。前回は「死は断滅ではない」というお話でした。超越的な神はないが、いのちというのは存在そのもので、それは無常でありながら輪廻転生していく。縁によつて集まり流れていく。そのことを理解して善く生きることが悟りであり涅槃の核心なのだ、ということでした。

阿倍野　そのとおりです。ポイントを話していただきました。付け加えますと、「いのち」というものを、「①神が創ったものではない。②偶然に素粒子などが集まってできたものではない。」とまず否定していることです。そして、総ての存在、宇宙そのものがいのちなのである、これを「山川草木悉皆成仏」といいます。全宇宙・

全存在そのものが「いのち」であるということです。そしてそれは固定してはいない。それは常に変転・振動している「無常」です。刻一刻と変化しつつ、縁という関係性をもって具体的な「いのち」として顕現します。その関係性は、あらゆる次元の時間と空間を含むものです。我々の認知する世界はそのほんの一部にしか過ぎない。もう一度申し上げますが個人の身体は60兆の細胞と1000兆の細菌などが絶妙のハーモニーで活動して作り上げています。私が創っているのではない。勝手にそれぞれが縁で集まり、それぞれが勝手に生きているのです。お腹の中では私の意志と関係なく、消化吸収作用が行われている。食べ物が入れば勝手に行われます。「消化しろ」と命令できない。悪い細菌が入ってくれば、勝手に白血球が攻撃する。いくら意志の力でも、白血球を増やしたり動かしたりはできない。つまりバラバラのいのちが縁で私の身体に入って、それぞれが大きな枠組みの中で自動的に働いている。私の身体と認識していますが、実際には私の身体というものはないのです。心臓も内臓も意志の力で止めることはできない。だから「無我」というのですが、そういういつ、関係性のあるものが集まって個体が形成される。その独特の関係性を「我」というのですが、それは阿倍野という人間を創るという意味ではない。独特の傾向性を持ったいのちのあり方ですので「非我」といっています。そしてそういう関係性を創るのは「いのちのありかた」です。それを「業」といいます。総てのいのちに慈しみを持つていきること、そのいのちのあり方の真理「無常・非我・縁起」を悟ることのできる生命体として顕在できます。それがこの地球では人間です。人間の生きる世界は苦に満ちていますが、慈しみに代表される、美しきもの、優しきもの、喜ばしきもの、感動に満ちたもの、知ることの楽しみ、愛する素晴らしさに生きることもできます。それを目指すことが涅槃であり、人間といういのちの最高の生き方なのです。

石川 それはもう、我々が感じる、或いは考えることの出来る世界です。「意味のない生に意味を創って生

きる」ことが悟りですね。

阿倍野 そうです。そしてそのための具体的な歩み、生き方はまず、何事にも「無常だからこたわりすぎるな」。そうして有意義な楽しい人生を創っていく。それが『涅槃』です。もともとこのちの営みは、「死」で中断せず、再び縁によつて誕生します。それが輪廻です。阿倍野が死んで阿倍野としてまた生まれるという意味ではありません。「我」はありますが「ワレ」という固有の「我」はないのです。それを「非我」といいます。そういう関係性を持ついのちが続いていくことです。だから善く生きれば輪廻は悪いことではないというのが前回の「死」の捉え方の結論でした。これは一般の「涅槃寂静」の理解から乖離した私の考えです。

石川 すみません。よく理解出来るのですが、形而上のお話で人間の思考・感情になりますので、ストーンと落ちるような説明はないでしょうか。

阿倍野 そうですね。私は、やなせたかしさんの詩を引用することが多いですね。

石川 やなせたかしさんというあの『アンパンマン』の。

阿倍野 ええ、2013年へ平成25年へに九十四歳で亡くなりましたが、次のものがそのお別れ会の時の詩です。声に出して読んでみて下さい。この詩を私はこのように捉えました。「雲」が、非我であるいのちです。ある条件が整うと縁によつて雲になります。雲は風に吹かれてとんでいずれ大気の中に消えていきますが、また条件が整えばわき出るように姿を現します。いのちというのは、阿倍野という固有の実体を持つものではないけれど、それぞれが生きてきて築いてきた「業」によつて、再び現れます。縁生です。縁によつてですから、親子や、夫婦や、兄弟、或いは様々な知己とのつながりを持つたいのちが再び集まってきます。もちろん、嫌いな人や、自分を嫌っている人も縁があれば集まってきます。

石川 なるほど縁のあるものが再び集まってくるわけですね。この原動力になるのが「業」という生きざまですか。

阿倍野 そうです。だからよりよい生き方をしていけば、よりよいものが集まることになります。前に喜びや感動や楽しみ、愛おしみ、情愛、慈しみ、満足、感動、充実感、有実感、快さ、トキメキ、達成感、幸福感といったものも人生にあり、「苦」だけが人の生き方ではないと申し上げました。もちろん「無常」で「苦」だから「生」に執着するな、なのですが、

お釈迦様はそうおっしゃって、かつ善く生きる手本を示されました。執着せず創り上げるのです。『人生に意味はない、善い意味を創って生きる』ことがいのちにとって大切なのです。

石川 善も悪もないと主張する方もおられますが…。

阿倍野 インドではお釈迦様の時代に六師外道という思想家たちがいて、その時代からそういうことは主張されていました。しかし悪をすれば我々はしんどくなりませんか。いのちは、悪い事をすれば濁り、疲れます。実際に戦争に行つた兵士の自殺率は高い。被害に遭つたり、恐怖、絶望を体験するとPTSD、という心的外傷後ストレス障害がおきる。人を騙して金儲けなどをしたら罪悪感や虚無感が心を突き抜ける。人を騙して金儲けなどをしたら罪悪感や虚無感が心を突き抜ける。いじめをしたら自分に嫌悪感が起きる。いのちは悪をすれば、或いは急情に流れれば疲れるようにできているのです。これは唯物論で、我々は所詮、物質的な大脳と身体でできているという考えからは出てき



ません。いのちという、やなせたかし先生の詩で言えば、雲をとかしている大空、そこから縁によつて生まれる雲そのものがそういう風にできているのです。

石川 そうですね。そのとおりですね。それは道徳とか教育もあるでしょうが、確かに他のいのちを傷つけたり、貶めたりしたら「心がしんどく」なりますね。悪口を言うとかスカツとするようにいて、心に澱のようなものがたまっている。

阿倍野 そのとおりです。心というのは進化した脳でもなく、身体でもない。だいいち身体も脳も瞬間瞬間に消滅生成を繰り返しています。60兆の身体の細胞は、脳と関係なく増殖し死滅し、白血球は細菌を攻撃している。心臓も肺も私たちの意志で左右できない。まあ呼吸は少しだけ止められますが。

石川 私は二十秒ほどです。(笑)

阿倍野 「心がしんどくなる」というのは、表面的には身体のだるさや頭脳の働きに現れます。心と「頭脳と身体」は連携しているのです。その心というのは「いのち」そのものです。

石川 証明はできない。

阿倍野 そうですね。証明できませんが、経験的事実です。そういう風に育てられるからだという人もいますが、人類誕生以来、悪い行動や考えによつて、心がしんどくなるということは、経験的に類推できる事実です。人間という種の持つ初めからのいのちです。これは否定できない。他をあざ笑ったり傷つけたりすれば心がしんどくなるのは事実なのです。脳が人間を支配していれば、脳で思考すればしんどくなるはずですが、そうはならない。また前に触れましたが、科学的な証明は、極めて狭小な世界でしか通用しないのです。本当の科学者はそれがわかつていますから謙虚です。「群盲象を撫でる」という諺があります。まあ

「盲」は不適當な使い方ですが、それはさておいて、いまのところ素粒子という微小世界も、大宇宙という世界も、ほんの一端しかわかっていません。それをもつて、いのちそのものである心を否定されても困るわけですね。

石川 そうですね。では、その心を善く生きる方向に向けるには、実際にどのようにすればいいのでしょうか。前回のお話ではその生き方が、まず笑顔でいい、突き詰めればそれに尽きるということでした。

阿倍野 そうです。温かい笑顔、雰囲気、それだけで心が和みます。実は大乘仏教には「六波羅蜜」という菩薩が修する六種の基本的な修行項目があります。菩薩というのは仏になる前の段階です。お釈迦様が説かれた慈しみ、行いなどを敷衍して、この六つにまとめたものです。その六つは布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧です。

石川 難しいですね。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧となくわかりませんが「忍辱」というのは。

阿倍野 忍辱は堪え忍ぶことです。広辞苑では「もろもろの侮辱・迫害を忍受して恨まないこと」ですね。最後の智慧は、よくおわかりのように仏教の根幹です。

石川 修行に入る前に基礎として守るべき事が持戒ですね。戒を守る、お坊さんでない一般の人が守る五戒だけでも難しい。不殺生・不偷盜・不妄語・不邪淫・不飲酒ですか。

阿倍野 よくご存じですねえ。あ、昨年佛教大学を卒業されていたんですね。(笑)

石川 そうですね。(笑) 殺すな、盗むな、嘘つくな、淫乱になるな、酒飲むな、と言う風に覚えています。もつとも酒飲むなは後から加わったようで、それを根拠にお酒をたしなんでいます。(笑)

阿倍野 たしなむですか……。 (笑)

石川 確かにお酒を飲むと知的な作業はできませんし、心のたがが外れるきもするのですが、夜、食事の後軽く…。

阿倍野 まあ、それは私も同じですが、これ、追求すると難しくなります。ただ、インドと違い寒い日本では酒も少しはいいではないかという説もあるですよ。

石川 般若湯なんている。智慧の源泉だと。これは少し無茶ですね。

阿倍野 そう、ほどほどで。酩酊はダメですし、できれば禁酒したいですが。

石川 私もそう思いますので、次第に禁酒日が多くなっています。

阿倍野 それは大したものですねえ。私も見習います。(笑)

石川 ではまず戒律の一番目、殺生といつても、蚊やハエは叩きますし…。

阿倍野 前にも述べたことがあるかも知れませんが、完全には無理なのです。例えば、我々が意識なくとも、我々の身体の中では白血球などが身体に害を為す細菌を殺している。

石川 あ、それもそうですね。

阿倍野 「無我」でなく「非我」という意味はここからも出てきます。「我」はあるのですが、縁によつて集まっているだけで、身体を完全にコントロールする「我」、我^{われ}という存在はないのです。話を元に戻しますと、殺生しないように努力することです。故意に生き物を殺してはいけません。食べ物も自由ですが、その人に食べさせるために故意に殺したものの、そうわかつているものは食べてはいけません。

石川 何だかご都合主義みたいですが…。

阿倍野 いえ、お釈迦様も、布施のお食事を選び好みされていない。難しくは「三聚淨肉^{さんじゅじょうにく}」といいますが、

人間というものを見つめたとき、目の前で殺して食べるということは、時代や地域によつて差はありますが感情的に無理な面があります。それをしてはいけません。自然に考えればいいのです。だから布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧という六波羅蜜も、殺すな、盗むな、嘘つくな、不倫するな、酒飲むなという五戒も、そういう風に努力するということです。その努力の中に解脱があるのです。六波羅蜜の最初の「布施」ですが、これもそうです。祇園精舎とか広大な塔寺を寄付したり、莫大なお金をだしたりはできません。もちろんできればいいのですが、心の問題になります。「貧者の一灯」という逸話をご存じですね。

石川 色々パターンがあるようですが、お釈迦様に灯りを供養するとき、貧しい女性が自分の髪の毛を切つて売り、それで油を買った。その灯りは他の金持ちの供養した灯りが全部消えても燃え続けていた、という話でしょうか。

阿倍野 そうですね。心のこもった供養なら何者にも勝るということです。でも、そこにはまだお金やものの供養が出てきますが、お金やものでなくてもいいのです。

石川 あ、笑顔ですか。

阿倍野 そうです。「愛顔」です。柔らかな人を包み込む顔、笑顔。さらに「愛語」、優しい言葉、これは即ち「いのち」が本質的に持つ、楽しさや喜び、感動や楽しみ、愛おしみ、情愛、慈しみ、満足、充実感、有存在感、快さ、トキメキ、達成感、幸福感、安らぎに繋がります。この世は「苦」だけではない生き方に繋がります。

石川 誰でも実行可能である。

阿倍野 そのとおりですねえ。私など性格的には、尊大な部分や、いじけた部分、神経質な部分、頑固なところもあります。しかし、その性格も直していける。

石川 そうなんですか。

阿倍野 総ては「無常」ですから、逆に言うとは固定して動かないものではない。そう努めれば変えていくことができます。心理学者のアドラーなどは性格を「ライフスタイル」と呼んで、「人は不斷に変わらないでおうという決心をしている」といつています。だから変えられるのです。因みにこのアドラーの考えですが、人は世界を自分の意味づけによって見て生きているので、突き放してみることが大切だといっています。石川さんは学校の先生を今もなさっているそうですが、アドラーはご存じですか。

石川 実は最近まで知りませんでした。フロイトは大学の授業で学びましたし、ユングも河合隼雄さんのご本などで知りました。もつとも刺激的な説以外はすぐに忘れてしまうのですが、このアドラーは『嫌われる勇氣』という題名に引かれて読み始めました。

阿倍野 フロイト、ユングと並ぶ世界の精神学の三大巨人の一人ですが、日本国内ではほとんど無名に近い方でした。「トラウマ」の存在を否定したうえで、「人間の悩みは、すべて対人関係の悩みである」「総ての行動には目的がある」と個人の内面に迫って、その改革の道筋を示された方です。実はお釈迦様の考えに凄く近いのです。というより仏教の哲学的部分を土台にしています。生きる人間の道筋を具体的に示しているのではないかと考えています。

石川 具体的には。

阿倍野 お釈迦様は「無常・非我・縁起」とこの世を見られました。だから「生きるに意味はない、意味を創って生きる」と極めて合理的ですが、意味を創るにはどうしたらいいか。その根幹は人間関係ですよ。

石川 そうか、「愛顔」「愛語」というのは人間関係の潤滑剤というだけでなく、基礎ですものねえ。

阿倍野 そうですね。ヒューマンリレーション、人間関係がないと人間は人間でなくなる。例えば有名な『ロビンソンクルーソー』というダニエル・デフォーの小説があります。無人島での漂流記ですね。ところが、他人の気配が常にある。やがてフライデーという仲間もできる。なるほど初めは独りなのですが、人間社会の中に生きているという気配が心の中にずっとあります。精神医療の世界では完全に人間社会と接触できなくなったら精神に異常をきたすといわれます。「人間は社会的動物」とはアリストテレスの言葉ですが、その社会は人間関係で成り立っている。その、大本は人とながれることです。言葉、感情、感覚、つまりふれあいですよ。だから「愛顔」「愛語」ということをあげているのです。そして大切なのは、その「愛顔」「愛語」に「慈しみの心」があることです。目的は「生きるものを慈しむ」、そして自分の心にそれを植え付け育てることです。だから、生活しているとよく挨拶しても無視される方がおられます、あるいは挨拶を返さない方もおられますが、「自分の心を育てる」のが目的ならば、それは気にしないでいいのです。こだわらない。そしてその行動は、いのちの働きですから、返事をしない相手の心にも影響を与えているのです。更に大切なのは、こういう「善き心」を常に持ち続けることです。「一日一善」という運動がありますが、もちろん大変素晴らしいことです。でも、その時の心だけでは、マイナスの心に負けてしまう。常にこれは善いことか悪いことかと考えて行動することが大切です。

石川 難しいですね。

阿倍野 半分正解です。実は「慈悲行」というのは、苦行の一つです。

石川 えっ！ お釈迦様は苦行を捨てられたものでは…。

阿倍野 ええ、断食や止息行はね。ですが「慈悲行」はもの凄く難しく、もの凄く簡単なのです。執着せ

ず暖かく生きるために自分の心に言い聞かせるのです。例えば「私をもの凄く嫌っている人が幸せでありますように」「私の嫌いなあの人が幸せになりますように」とね。

石川 簡単なようで、心理的な抵抗が大きいですね。

阿倍野 でもないですよ。慈悲の心、慈しみの心を保つように、保つようにしておれば自然とそうなります。偉そうに言いまして。

石川 いえ、そうされているなど感じることはありません。

阿倍野 そうですか。ありがとうございます。そうすることが解脱です。もつとも、これもそう努力することであり、こだわりすぎてしんどくなつてはいけません。

石川 自然に……ですか。

阿倍野 「こだわりを捨てる」が基本です。しかも、慈しみの心にこだわっていく。難しくはないのですよ。自分に常に言い聞かせる。失敗したり忘れたりしたら反省する。懺悔と言いますが、そしてまた笑顔と慈しみの心で声をかける。誰でも何処でもできるのです。お釈迦様の教えは実にシンプルでしょう。

石川 それが難しい。

阿倍野 続けること、反省すること、続けること。これは自己コントロールです。お念仏やお題目も大切ですが、いくら「助けて欲しい」と願っても、あなたに帰依します、といつても、自分が反省して日々の行動を変えないと、自動的にはよくなりません。そうすることで、あなたの心が変わり、そのいのちの波動は周りに伝わり、縁によつて良い方向へと変わっていく。ほら「人を変えるにはまず自分が変わることだ」といいますが、真理ですよ。その具体的な方法までお釈迦様は教えて下さっていると思います。

石川 私などすぐに人のせいにしてたり、世の中のせいにしてたり、恨んだり、怒ったりしています。

阿倍野 正義感も強いようですね。

石川 それも自分のありのままを認めたくない自己逃避かも知れません。無力感、劣等感の裏返し。

阿倍野 そこまでわかられたら、日々、慈しみを持って愛語、愛顔されることですね。もちろん、正義感は、怒りとともにではなく慈しみとともに穏やかに出していけばいいのです。

石川 それができれば…。

阿倍野 それが悟りだと私は思います。慈しみのころをもつて輪廻していく。そうすれば、またそういう教えに巡り会い、愛や幸せに満ちた人生が続くのでしょうか。

石川 私という個ではない、「非我の我」ともいうべき、いのちのころとして輪廻していく。

阿倍野 ええ、私たちもまた縁によつて巡り会いますよ。どうやら妙な関係性があるようですから。(笑) 但し、地球でもなく、この宇宙でもないかも知れませんが。

石川 バルタン星人とか。ウルトラマンとか。(笑)

阿倍野 バルタン星人はちよつと。(笑) 仏教を生んだインドの時間とか空間の概念は、超絶していますね。例えば我々の住む大宇宙は現代科学では140億光年の大きさで、更に広がっているといっています。その宇宙は無から突然生まれた。いま一生懸命、宇宙に満ちて宇宙を押し広げている謎の物質を探しています。宇宙のことなど現代科学ではほとんどわかっていない。ただ宇宙物理学者は数学を武器に推測しているだけです。我々の住む大宇宙を泡に例えて、そのような泡が無数にあるなんていう話もあります。インドではこの大宇宙の成立から滅亡までは「一劫」、計算した方がおられますね。(笑)

石川 「一劫」をですか。

阿倍野 はい。(笑) 二兆年だそうです。

石川 二兆年ですか！

阿倍野 まあ真偽はともかく、人間の一生は刹那ですね。その刹那を善く生きる。ただ刹那しか生きない人間と違つて神様とか精霊とかは、一劫くらい生きる。その神様は肉体のない精神だけのいのちです。SFなんかではエネルギーだけの生命体もありますねえ。前に言いましたか、アーサー・C・クラークは知識を空間に保存する生命なんて考えています。機械生命なんていう映画もあります。そんなものに生まれるかもしれない。もちろん繰り返しますが石川とか阿倍野という不滅の個ではない。そのような傾向性・特色を持ついのちが縁によつて顕現します。

石川 私が続くのではないですね。

阿倍野 ええ、縁の強い似たものが集まるだけです。できれば慈しみのあるいのちが集まりたいですね。次はあなたが私の父かも知れない。(笑)

石川 酒のみの父です。(笑) 父は困りますが、ぜひ、そうなりたいと思います。では、最後にもう一杯。

阿倍野 そうですね。今日はあまり飲まずに真剣すぎましたから、もう少しだけいただきますか。

石川 私はちよつとほろ酔いになりたいです。酩酊しない程度に。(笑)

阿倍野 では、そうしましょう。また、対談の機会があるといいですね。

石川 できれば続けたいと思います。長時間、ありがとうございました。

- 宮元啓一著 『ブッダが考えたこと』 春秋社 2004/11/20 第一冊発行
- 宮元啓一著 『仏教誕生』 講談社学術文庫 2012/3/12 第一冊発行
- 宮元啓一著 『仏教の倫理思想』 講談社学術文庫 2006/4/10 第一冊発行
- 岸見一郎著 『アドラー心理学入門』 ベスト新書 1999/9/15 初版発行
- 岸見一郎著 『アドラー心理学実践入門』 ワニ文庫 2014/5/30 初版発行
- 地橋秀雄著 『ブッダの瞑想法』 春秋社 2006/5/30 第一冊発行
- 地橋秀雄著 『瞑想の不思議な力』 王様文庫
- 中村元著 『「老いと死」を語る』 麗澤大学出版会 2000/5/29 第一冊発行
- 中村元著 『「仏教の真髄」を語る』 麗澤大学出版会 2001/9/4 第一冊発行
- 中村元訳 『ブッダのことば』 岩波文庫 1984/5/16 第一冊発行
- 中村元・三枝充恵 著 『バウッダ』 講談社学術文庫 2009/12/10 第一冊発行
- アーサー・C・クラーク著 伊藤典夫訳 『2001年宇宙の旅』 早川文庫 1993/2/28 発行
- 小室直樹著 『日本人のための宗教原論』 徳間書店 2000/6/30 第一冊発行
- 梅原猛著 『人類哲学序説』 岩波新書 2013/4/19 第一冊発行

※○印は、阿倍野・石川が読みやすかつたもの。



中村元



アーサーCクラーク

※中村元先生は『「仏教の真髄」を語る』より。他の写真はHPより。



梅原猛

少年時代

大西隆史

人はみな宇宙人であることを告白したか扇風機まえ

大仰な父の全てを信じてた眠り薬の小さな旅路

真実でさえもノートに書けなくて壊れたままの冷めた日曜

情熱の日々を怖がるまなざしは汚れた未来をなくしてしまう

神さまを映し出す僕金色の歌になつたらあなたの元へ

きつと君に託す終わりを見つめてた溢れるほどの黒い閃光

遠ざかる西日きのうに手を振って影を振り切り走つたね君は

いくつもの日向をすぎてありふれた鏡の花のリズムで話す

永遠たる冬の鉄塔夕焼けに忘れ去られた雲を見つめて

僕だけの笑顔の恋の睨うら挫折になつたひ弱な五月

たましいを失い黒いかなしみにうたれて染まる生真面目な街

動かない初雪ですねまどろみとともに寂しい朝寝と共に

幕切れを集めて夜の永遠を見つめあなたの肉体みたい

ぶらんこの嘆きのあとで溶けていく冷たい午後を見る時の目か

波がない浮かぶ絵画のようだった罪の手紙のことなのでしょうよ

情熱の僕の子供を待っていた一番星はかすかな宇宙

嘘でした走る光に隠された傷誰かのことを知らずに一人

人々を見守る君の戦争に隠されていたか永遠の家

幸せの形はなんだろうねって図書館二階秋空に告ぎ

暖かい例え話に愛されて待ちくたびれた花を手折る日

透明な罪のどこかに風景は運ばれていく地下鉄の中

初恋に恋した朝の残像に風に向かつて歩く螳螂

清潔な午後の光を待っている逢瀬の跡を辿っていけば

通い慣れたこの道でただ左手の温もりだけが足りないタベ

どうすれば伝えられたか分からない言葉にすればきつと壊れて

黙祷の口は言わない鐘の音の重く苦しく君と私の愛

いくつものパラドックスに気づかずに冷たい雨に濡れそぼつてた

口づけの記憶に気付く真つ暗な夕日の夢は見たくない

すれ違う信号青になり歩くあなたの去ったこの街の色
あたらしい季節外れの傘をさす小学生に笑われていて



文芸集団 Actos2008

§ 趣旨

本誌「はじめに」をご覧ください。

文筆活動へのお誘い

§ 活動

『アクトス誌』年4回発刊[各1部を送付]

奇数月に合評会・親睦会など

§ 会費

- ・年12000円(3月末までに一括郵便払込)・その他費用、なし。但し合評会出席時500円必要
- ※学生会員は半額
- ・会費払込の無い場合退会。また返金等なし



§ 同人(創作希望) になるには §

- ① 資格なし、創作ジャンル自由、下記宛てに申込
 - ② デジタルデータ作成・ネット送付必須
- 連絡先 〒673-0031 明石市宮の上1-17-614
大西方 アクトス編集室
Tel&Fax078-922-4562 actos2008@mbe.nifty.com

◆ HPをご覧ください。掲示板もあります。

<http://actos2008.o.oo7.jp/>(「文芸 アクトス」で検索)

◆ 奇数月第3土曜日午後。西明石(サンライフ明石)で例会。
参加は自由

§ ご支援下さい §

読書会員(支援会員)制度。ご連絡下さい。

[年会費は2400円]

※ 年4冊のアクトス誌と臨時増刊号などをお送り致します。

※ 懇親会など参加いただけます。またアクトス通信に「おたより」「感想」もお寄せ下さい。

がんセンター

石川希理

キリキリキリと太陽が熱い。

熱湯の中を喘ぐようにして三島祐一は歩いていく。

六十五歳からを前期高齢者というが、よく出来た言葉である。二十五歳くらいで成長が止まり緩やかに下降する肉体は、四十歳前後で傾斜が急になり始める。人の名前が出てこなくなり、ペタペタと小走りになる。下腹が出てきて頬が弛み、ほうれい線が深くなる。髪の毛は細く少なくなりだし、白髪が増え出す。その老化は、六十歳くらいまで続く。そして還暦辺りから、急降下が始まる。

（人によつて差が大きいというが、俺の場合は標準的だな）

三島祐一は、被っていた編み目のキャップを脱い

で、頭に風を当てた。後頭部が涼しい。

信号機の点滅で走れなくなったのは五十代半ば以降だが、三年くらい前から白髪と脱毛が猛加速している。眠りは浅く四時には目が覚める。どういうわけが夜中によく足がふる。三歳違いの妻はこれはどういうわけかよく眠る。彼女の髪の毛は細く少なくなつたが、女性ホルモンとかの関係で、三島祐一から見ると羨ましいくらいだ。それでも軽くて簡単とかいう既製品のウィッグを十方で買つてつけている。

（古希というが、その通りになるなあ）

三島祐一はうす鈍色のため息を落とした。寿命は延びた。そしてみんななるほど「還暦」でも元気だ。それは栄養と医療のおかげであろう。還暦から十年経つて「古来、まれ」という「古希」でも生きていく。だが、男の健康寿命はここままで、そこから傷んで縮んで動けなくなりはじめている。新車から

十年くらい自動車が次第にガタが来る。やがて修理も追いつかなくなり、部品の入手も難しくなり、廃車に近づく。

（ま、生身、交換部品はないし、しゃあない）

三島祐一はバス停に辿り着いてまた帽子を脱いだ。バスに乗るとよく冷えている。七十歳以上無料だった高齢者バスは七十五歳以上になった。イコカが使えるので便利だが割引のないのが辛い。そんな雑念に浸りつつヒンヤリした空気にホッとしたが、四つめのバス停が「がんセンター前」である。冬場なら、そして若ければ夏場でも充分歩ける距離だ。車は妻が、二日前から女子会で岡山まで乗っている、明日まで帰ってこない。

市の健康診断で、胃粘膜の萎縮が見られます。ピロリ菌感染です。精密検査といわれて恐ろしくなり、慌てて「がんセンター」で診察を受けて、今日は内視鏡検査の日だ。近所のクリニックにしようかと思っただが、「がんセンター」は大した距離でもない。

昨日は一日、流動食である。自分で作ったおかゆと素うどん。今朝は水を一杯飲んだだけだ。腹が減っているのがわかる。バスを降りるとぬるい太気が肌にまとわり、針のような太陽光が襲いかかってくる。だが「がんセンター」は目の前である。ほんの僅かの我慢でいい。

「県立がんセンター」は一部二十階建て。巨大な建築群と最新の機器と、優秀な医師が揃っているという評判である。日本でも十指に入るガンの拠点病院だ。一階の受付は三階までの吹き抜けで、ゆつたりとしている。何処かの紹介がないと初診料二千八百二十円がかかる。おまけに待ち時間が長くなるが、いまの三島祐一には関係ない。毎日、時間の海で沈まないように、溺れないように漂っているだけだ。宮部みゆきの文庫本と、読売の朝刊を持って来ている。読みたくなければ居眠るだけだ。内視鏡検査は五十代に受けたことがあつてうんざりだが、最近のものは、細くなっているそうで少し

はましという。初めてならば不安に包まれるに違いない。また今回は診察の時に、眠っているうちにできる胃カメラを選びますかといわれて、一も二もなく頷いた。ほとんど気づかない間に検査が終わるらしい。

大きなガラス戸は左右に六枚も続き、踏みこみの奥にさらにもう一度ガラスのドアがある。受付に入ると、爽やかな風がゆつたりと旋回している。病院臭はない。突き当たりの壁面は全面ガラスで、広い中庭から明るい光が差し込んでいる。偏光ガラスとかいうのだそうで直射日光は遮るらしい。その壁面までは二十メートル以上もあり、中間に受付機が三台並んでいる。受付機から壁面までは余裕のある背の高いソファが数十もあって、左手の薬局の待合になっている。

冷たい空気にまとわり付いた熱気を溶かしながら、受診カードを出し、辺りを見回す。

先日も中村という知人に会った。中肉中背の美

男子である。部署は違うが昔の同僚で、七十五歳は過ぎているだろう。前立腺ガンで手術を受け、完治したらしい。予後の診察だという。穏やかな人で、誰からも好かれていた。話をしていると、短歌の会に、文学の同人、高齢者大学のフォークダンスと朝の散歩の会、友だちとのゴルフの会、そして週に一度は専門学校で、経理書類作成関係の講師をしているという。家に閉じこもっていることの多い祐一には珍しくもあり少し羨ましくもある話だ。短歌の会は女性十人ほどと、男性が三人と聞いている。歌会が月に一度あり、ふた月に一度は吟行という旅がある。もちろん親睦会も持たれる。更に上部団体に繋がっていて、日本各地での大会もある。短歌を詠むという創造的な行為と、飲食や旅行という楽しみがセットだ。文学の同人は短歌の会のミニ版だ。フォークダンスといわれて「オクラホマミキサー？」と問い返したら、鼻の先で笑われた。現在の高齢者大学で行っているのは社交ダンスに近いらし

い。(高校時代にオクラホマミキサーで、あの子と手がつなげるとドキドキしたものだ…)話を聞きながら、祐一は時代遅れの頭を心の中でコツコツ叩いたのを覚えていた。

前立腺ガンは見つけやすく完治しやすい。祐一も泌尿器科で検査を受けている。異常はないが、トイレが近くなり、我慢がしくくなっている。

それにしても歳上の中村は澁刺としていた。青春時代を取り戻しているのかも知れない。いや、自分を押し殺して耐えた四十年間のサラリーマン生活。それで使った時間を取り返すべく、時を濃縮していま自分のために味わっているのだろう。

(まあ、人それぞれだが…)

筒井の顔が浮かんだ。頭の片隅にいつも屈み込んでいる。何かの拍子に膨らんですぐに消える。筒井は六十五歳である。引き締まった黒い顔をした小柄な男である。三島祐一の大学と職場の後輩だ。同じ課に属したこともある。特に親しいという

こともないが、たまに二人で飲んだりしたこともあるし、祐一の家に来たこともある。世渡り上手で、次長にまでなり、退職後は系列の子会社の常務になつてゐる。退職金を二度もらい、二つめの子会社の役員になつたときに肺ガンになつた。軽いものだったが、次から次に転移した。人間の身体の中にはガン化した細胞が無数にある。身体が弱つたり、高齢化すると暴走を始める。特定の部位のガン細胞を叩いても、ある閾値を超えていれば他の部分が暴れ出す。といつても筒井は、二ヶ月に一度点滴治療を受けながら役員を続けている。ガンに負けていない。それでも退職者親睦会の「黎明会」案内状の返事に「歳を取るとはこういうことですかね。身体の部品が壊れたり、不良品の集合体です」とあつたから、相当こたえてはいるのだろう。

(まあ、人の身体はいろんな命の集合体、次第に老朽化するからなあ)

「黎明会」は、部署毎の会もあつて、三島祐一は

購買部会である。「黎明会三部」という。年に一度だから参加するが、まず話題の三分の二は健康のことだ。退職した当時は後輩の人事や会社の話が気になったものだが、十年も経つと興味が失せた。よく知っている後輩も部下も定年である。もつとも、現役の部長や課長が招かれることも多いから、粘り腰で関係を模索するものもある。上手くいけば、気楽な嘱託採用の道もある。会社の保養施設の理事になった者もある。

三島祐一は改めて辺りを見回して短く息を吐いた。

年金暮らしには、小遣い稼ぎもしたいが、なにより社会参加がしたい。若いときからしたかった、というような特別の夢や趣味があつて、打ち込んでいる者はいい。だがほとんどは何もないことに気がつく。山歩きといつても体力が衰えている。たまの休みにするにはいいが、毎日の時間潰しにはならない。ゴルフやスキーやというスポーツ系は同じことだ。絵

や俳句や陶芸といつてもあくまで忙しい仕事の合間にするから充実していたのである。時間が十分にあると、それに没頭できない自分に気がつく。なによりプロとはほど遠い力しかない。「お上手ですね」といわれて、「趣味の方も大したものだ」と自惚れしていたに過ぎない。そうすると仕事で、そこそこ給料が出てとなると縁故しか日本の社会には道はない。

(まあ、それも身体が…、気力もなあ)

ここに来ると知っている誰かしらを見つめる確率が極めて高くなる。生涯で男性は五十四パーセントがガンになる。といつても五十歳までは二パーセントで、五十歳台でも六パーセント。本格的にガンにかかるのは六十歳からで、正に跳ね上がるといつてもよい。だから高齢になった知人とであうことが多くなる。場所的にも長年勤めた勤務先や住所地からさほど離れてはいない。

(誰もいないなあ…)

ホツとするような、少し残念なような薄汚れた気分だ。自分がガンかも知れないという不安と、同病者を見つけて安心したいという気持ちと、既に酷いケースを見つけて、まだまだという妙な優越感に浸りたいのかも知れない。また、ガンでも仕方ないという考えと、哀れに思われたくない、隠したいという思いが潜んでいるのも知っている。生への執着、疲労や苦痛からの逃避。それが避けられないことへの無力感と怒り。ところがどす黒く汚れていく。

先日の診察時に作ってもらったカードを差し込み、受付票を受け取ると、総合受付へゆく。そこで健康保険証のチェックなどがあり、内視鏡検査センターに向かう。

(おや……)

三島祐一は内視鏡センターの入り口前の待合で、見知った顔を発見した。

待合入り口がコの字型の開口部で、その端にテレビがあり、患者は八人ほどが壁際のソファに座つ

ている。新聞を読んでいる者、腕を組んで目を閉じている者、夫婦者もいる。どうやら夫の検査に妻がついてきたらしい。睡眠薬を利用した内視鏡検査の場合、車の使用は厳禁である。家族などに送迎してもらうか、三島祐一のようにバスか、近ければ徒歩ということになる。

ほとんどが高齢に属して、四十代くらいとおぼしき男性が一人いるだけだ。受付開始まで十分ほどなので、これが本日十一時検査組なのだろう。その中に、逢田治がいる。コの字型の一番奥の席から、テレビ画面を見ているような気もするが、三島祐一を目の端で捉えて、知らん顔をしているのかもわからない。

「逢田さんじゃないですか」

三島祐一は細い声をかけた。

「あ、ああ。三島さんか」

逢田は、初めて見つけたというような目をした。やはり気づいていたようだった。

(ガンか……)

三島祐一はそう思った。

不思議なものでそれは第六感だった。五感とは視・聴・嗅・味・触の五つの感覚。五つの気管、目と耳と鼻と口と身体全体を通して得られる。そして頭脳は対象物の状態を認識する。この場合は、目の色であり、音であり、匂いである。だが逢田のそれには何処も異常はない。いまはそれを飛び越えて直感的に思ったのである。検査だからまだガンだとは限らない。それに対する怯え、不安とかが、雰囲気に出ているのではない。諦めと生存欲の葛藤が三島祐一の心の中に忍び込んだのだ。

「胃の検査ですか」

そう口から出た。

「いや……、あ、たぶん」

内視鏡といつても食道・胃・十二指腸などを検査する上部内視鏡検査と、大腸などを見るものがある。

逢田は口をモゴモゴとさせた。

先日あった中村と同様で、同じ課や部で働いたことはない。事務と現場合わせて二千名ほどいる会社だが四十年ほど勤めていれば、なんとなく見たことがある人というようになる。まして事務部門は本社に集約されていて、四百名弱だから知人も多い。

三島祐一は購買部検品課長代理で定年を迎えたが、数歳上の逢田は次長を長く務めた後、業務部長を一年して退職したはずである。頭も切れるしよく飲むし、部下の受けも悪くない。ただ強引さが目だった。そのせいで出世はしたが組合の力が強く管理職泣かせの業務部長にさせられたらしいと聞いている。最後は組合に賃金引き下げをのませるかわりに退社した。といつても退職後は関連会社に天下りして社長になり羽振りがよかった。その男が随分と気弱になっている。というより命に張りが無い。

目を伏せた逢田とそれ以上話を続ける雰囲気ではなかった。三島祐一は、自分も検査だといって反対側のソファに座り込んだ。

僅かな会話の中から、ものが飲み込みにくいと聞こえたから食道ガンかも知れなかった。

（なんだろうな、ガンに間違いないという妙な確信は）

三島祐一はふつと頬を緩ませた。俺はいま、ガンが見えるのだ。それはガンに対する怯えが彼の感覚を過敏にしていたのかも知れなかった。

時間が来ると逢田は何もいわずに席を立つた。

三島祐一も黙って室内に入った。

（まあ、他人のことを心配する立場でもないしな）

検査結果が悪い場合は、妻と一緒に聞くことになっていく。現在はガンの治療成績も上がり、末期でも告知をいきなりする医者もあると聞く。

（無茶だ）

そう思う。覚悟していても、人間など脆いものだ。

医者もいろいろだからなあ……、といっていた友人の山本の顔を思い出した。彼は糖尿と高血圧の持病がある。それで医者通いが多いらしい。その言によると、歯科医などではよからぬ資質のものもいるが、一般の医師でも同じだという。国家試験があるはずだが、なるほどいわれてみれば、合格率は極めて高い。九十パーセントを超えらるという。もちろん、医学部で勉強、実習して鍛えられ、高度な知識、技術はあるのだろう。その点、知識だけ問われる日本一難関という司法試験や外交官試験とは比べるべくもない。ただ医学部はサラリーマンの退職金以上のお金がかかる。それで得た資格である。金儲けに必死になるのは無理からぬことだろうし、資格をとってしまったえば本も読まぬものもあるのだろう。またどんな試験にしろ人間性まで見通せるはずはない。虐めることに快感を覚えていた人間でも医者になれる。ぞつとする話である。それにより教養力が落ちているのは現在の日本の学生の致命的

欠陥である。

（まあ、いい医者に当たることを祈るだけだ）

そう思うより仕方がない。特別に社会的地位が高かったり経済力があれば別だが、祐一の年金二百五十万レベルでは望むべくもない。独り者なら百八十万が年金の平均である。

「担当です」

女性の声にはつとすると、看護師がいた。年齢と話しかからしてベテランらしい。昨日の食事や絶食の確認があると、たちまち左腕に点滴が入った。そのまま、検査室に移動する。白衣にマスク姿の男性がいて胃力メラの準備をしている。

「口を開けて、はい」

看護師が喉に向かってスプレーを噴射した。

「それじゃあ、寝台に左を横にして、はい、足をくの字に曲げて、ベルトを少し緩めましょうか」

横になると、たちまち口に丸い穴の空いたマウスピースを咥えさせられた。前の検査では、肩に胃の

動きを止める注射が打たれ、喉に麻酔薬が入れられた。今回は肩の注射はない。

「よだれは左の口の端からだらりとね」

看護師が左あごのしたにシートを入れた。

「では」男性がくぐもった声で云った。右手に注射器がある。「眠る薬を入れます」

点滴の途中の分岐から注射液が入る。

突然、意識が途絶えた。

気がつくど、ベッドの上に仰向けに寝ていた。

よだれの記憶も、喉に異物が入った感覚もない。点滴も外されている。深く喉の奥の感触を辿れば、僅かに引きつるような気がしなくてもいいが、それは茫洋としている。

「大丈夫ですか」

看護師と男性が覗き込んでいた。

「あ、はい」

声は普通に出た。

「もう少し休みましょうね」

そういわれてまた瞼が落ちた。

目が覚めると、大して時間は経っていないかった。「ゆつくり休んで帰って下さい。昼からは軽く食べてもらつても結構です」

ファイルを渡されて、検査室を出た。何処にも異常はなかった。頭もはつきりしていた。前のあの苦しい胃カメラ検査が嘘のような日であつた。検査料は六千円弱である。一週間後に結果報告の診察があるが、大きな異常があれば「妻も一緒に」と連絡があるに違いない。

（まあ、胃粘膜の萎縮とかピロリ菌とかだから……）
小さな不安を押し殺して、祐一はドアを出た。再びたつぷりと暑さと湿気を含んだ大気が押し寄せてきた。

がんセンターからは何も連絡がなかった。

女子会の旅行から帰ってきた妻は、少しだけ眉根を寄せて「大丈夫よ」と簡単にいった。まあそれ

しかいいようがないのだろう。

特段の異常はないのだろうが、それでも不安を抱えつつ三島祐一は診察日を迎えた。

「ああ、大丈夫ですねえ」

四十代にはならないという若い医師は画面を見ながらこともなげにいった。

「ピロリ菌も見られませんが、呼吸検査もしますか」

「あ、はい」

祐一の喉から、意識せずに声が出た。

検査から一週間の間に、六十五歳の筒井が腹膜播種で入院したと聞いた。ガン細胞が腹膜に種をまくように広がると、治療が極めて困難になる。（若いし、元気で、しかも会社役員で羨ましかったが……）

三島祐一は引き締まった黒い顔を思い浮かべた。心の中にはランブブラックのようなねじ曲がつた優

越感があつた。若くて優秀だったが、六十半ばで世を去るのだ。生き残ったものが勝ちという人間もいた。祐一はそれに組みするでもなかったが、そうかといってそれを否定するほどの生き方をしてきたわけでもない。どう生きたかが大切だと思うが、生存欲がその認識を曇らせていた。

そして同じ一週間の間に、退職者組織「黎明会」の知り合いの連絡があつた。逢田が、ステージ4の食道ガンで余命が三ヶ月という話である。お見舞いは固く遠慮するという。

暗い予感が当たつたと思つた。人の命がなくなるという話である。だがそれは哀れみと同時に、自分はそのではないという優越感や慢心を潜ませていた。

（俺は嫌な男だ）そう思つた。

逢田は嫌いな男ではなかった。しかし逢田の出世には関心のない振りをしつつ、妬みと嫉みがその中に含まれているのを知っていた。年齢は少し逢田

が上だが、平均寿命までは五年ほど早い。気の毒だとは考えたが、やはり自分でなくてよかったという身勝手な自己愛が心の中にとぐろを巻いていた。（明日のいのち、いやいまこの瞬間さえわからないに）

自分だけは別というより、自分のことが客観的に見られないのが人というものである。

俺の生涯に、俺は満足しているといいつつ、実際は、したいこともせず、いま為すべき事をしてこなかったことを知っていた。

（いまから、できるなら……）

そうしようと思つた。時間の海に潜つて先ずは自分探しだ。そしてかきわけて泳ぐ。途中で溺れるかも知れなかったが、それはそれでよかった。

（ああ、ギターを……曲を作りたい……）

若い頃の夢を思い出した。老人行進曲になるか、それとも葬送行進曲になるか……、祐一は白い歯を見せた。

キーボードを打つ医師の手元を見ながら、浮かんできた筒井と逢田の顔を、無理やり記憶の底に押し込んだ。胃の辺りがキリツと音を立てたような気がした。

了

「国立がん研究センター中央病院」



遅れた盆帰り

高阪博一

ここに来るようになって、もう三年になる。思えば、早いものだ。右手に花束を持ち、左手に水桶を下げて歩く。行き交う人々は子供連れがあり、夫婦と思しき人もいる。歓声を上げて飛び回る子を叱る親もいて、一様に楽しそうだ。いつもは人の疎らなこの場所が、まるで公園のようになってしまう。

今年はやけに暑い。立秋が過ぎたのは、暦の上のことだ。幸一は水桶コウイチを置いて、ふうーと息を吐いた。ぬめつと油を流したような黒い石の塊が光を強く反射している。「もう少しだ。あの角を曲がれば」ハンカチで汗を拭いながら、誰に言うともなく声を出した。蟬の鳴き声が急ぎ立てるように纏わりつき、暑くなつた背中を押すのだつた。

「やつと着いた。佳恵ヨシエ、久しぶり。この頃はサボつてばかりで、ごめん。ええつと、この前はお彼岸だつたね。もう、五カ月も経つんだね」石に向つて、幸一は喋りかけて、勢いの強くなつた雑草を抜き出した。一通り抜き終えろと、石に水をかけ、花を供えた。「好きな百合。微かだけど、香りがするよ、どう」と言いながら、線香に火を点けて、台においた。「由佳ユカを連れてくる予定だつたけど、どうも都合が悪くなつたようだ。あいつも、忙しそうだよ」幸一はちよつと沈んだ低い声で、目の前の石に語りかけた。入道雲が襲いかかるように頭上に拡がっていた。

健康診断は毎年夫婦で必ず受けていた。互いに六十を過ぎていたので、身体に多少の欠陥はあった。コレステロールや血糖値や血圧が基準値より若干高いのは、仕方がないと思つていた。無茶をしない限りは大丈夫と思つていた。佳恵は「細い人ほ

ど、元気でしょ。死ぬまでは生きられるんだから」
と言つて、いつも周りを煙に巻くのだった。

そんな或る日の午後、佳恵は店で突然おかしな
なつた。カウターから離れた席に珈琲を運ぼうと
して倒れたのだ。がしゃんという何か壊れる音がし
たのを幸一は覚えてゐる。なのに、誰が佳恵を助け
起こしてくれたのか、誰が救急車を呼んでくれたの
かは覚えていない。救急車のけたたましいサイレン
の音とじりじりするような強い陽射しだけが、鮮
明に甦ってくるだけだ。

呆気ないものだつた。入院して、三日後に亡くな
つた。脳梗塞だつた。由佳とたつた二人で枕辺に寄
添つてゐた。びくりとも動かぬ口許を二人で見詰
めてゐた。結局、意識が戻ることはなかつた。「花嫁
姿を見せられなかつた。親不孝な娘だわ」と由佳
がぼつんと呟いた。二人とも、どこかぼんやりとし
て、今ある現実が夢であるかのような気になるのだ
つた。たつた三日が途方もなく長い時間のように感

じられた。甲斐のないこととはこんなことだと、幸
一はしみじみ思つた。

「由佳は仕事が忙しくつてね。有能な新人を担
当して、売り出そうと必死のようだよ。夜も昼
もない暮らしだそう。編集つて、そんなに面白い
のかなあ。よく分からないけどね」幸一は目の前の
石に向い、愚痴つぽく語りかけた。ちよつとした後
悔の念を交えながら。

由佳は東京の大学に入学し、四年を過ごして、
出版社に就職した。どちらの影響かは知らないが、
中学生時分から文学書を読むことが多くなり、読
書感想文などのコンクールで入賞するようになって
いた。高校生になると気の合う友人を誘い、読書部
を新しく立ち上げて、図書館の管理などにも積極
的に参加してゐたようだった。

或る晩、由佳が思い詰めたように幸一たちの前
に坐つた。嫌な予感がした。「来年の受験は、東京
のA大学に行きたい。どうしても。いいでしょ」と思

い詰めた顔で切り出してきた。反対する術はあつたとしても、それを口に出すことは出来なかつた。来るものが来たのだと思うしかなかった。二人とも、一人娘には甘すぎる親であつた。

就職はこちらでして欲しいという微かな願いも空しく、由佳は東京の或る出版社を受験した。地方の都市では思うような就職は難しく、ましてや出版社は更に……と幸一は思つてもいた。何気なく目にした週刊誌の記事を見て、幸一は驚いた。その出版社の倍率は凄まじいものだった。もうあれから八年が過ぎてしまつていた。

辺りに人影が少なくなつたような気がした。幸一は線香の煙をじつと見詰めた。仄かに甘いような香りがした。「佳恵とは見合ひだつた」何故かしら、そんな言葉がぼつりと零れた。「あの頃では珍しかったなあ。別に女嫌いではなかつたけど」遠い日を懐かしむように、苦笑いを浮かべながら幸一は呟いた。確かに、昭和五十年頃では、周りはほとんど恋

愛結婚であつた。

父の残した喫茶店を母が切り盛りし、一人息子の自分を育ててくれた。高校時分からは店をばちばちと手伝つて、珈琲の淹れ方を母に習つた。大学に入つても、店の手伝いはずっと続けていた。友人がガールフレンドを作り、遊んでいても、別に羨ましいとも思わなかつた。何故か店にいと落着くのだつた。

夜の闇の中を漂う密やかな香りや春の花の上を通り過ぎてく軽やかで弾むような香りが、何となく分かる気分になつていた。「この珈琲の産地は？」と香りを嗅いでいる方が、嬌声に充ちた甘つたるい香りに包まれるよりも良かったのだ。

卒業しても就職しようとしなかつた。幸一はこの店を継ぐことが当然のことと思つていた。母もそうだった。だが、母は一日中店にいる息子を心配していた。女性と交際しようとしてもしない息子を見て、母は焦つたのかもしれない。何処からか、見合い話を

持つてきた。男女の縁とは不思議なものだと幸一は思う。三つ下の佳恵と出会って、六か月後には母と三人、一緒に暮らしていた。

佳恵は従順に母の言うことを聞き、決して母を避けようとはしなかった。サラリーマン家庭で育った佳恵であつたが、店を嫌がるそぶりは見せなかった。母と上手くやつてくれる佳恵を、幸一は頼もしく思った。一年が経ち、二年が過ぎると、徐々に母が店に立たなくなつた。そして、四年目に入つた時、母はしたいことがあると言つて、店をさつさと二人に任せてしまつた。せつかな母らしく、それから三年も経たないうちに、旅立つてしまつた。知らないうちに、悪性のものが身体を蝕んでいたのだつた。

蟬の声がいくぶん小さくなつた感じがした。合掌していた手を解き、そつと目を開けると、線香はもう殆ど灰だけになつていた。陽射しも緩くなつたと幸一は感じた。目の前の石にゆつくり手を伸ばした。細長い方錐状の頭に触れた。発熱したよう

なほてりが掌に伝わってくる。それは以前いつも触れていたものの記憶を甦らせた。「この温もりと滑らかな肌合いは、確かに……」幸一は頭の暗い片隅に覆つていたものを取払うように、眼前の石に語りかけた。ゆつくり、実にゆつくりと、面取りをした鋭さのない角に沿つて、手を下に降ろしていった。

佳恵が身籠つたのは三十五の時だつた。遅い妊娠であつたため、佳恵は胎教に注意を払つていた。生まれたのは、小さな女の子だつた。妻の一字をとつて由佳と名付けた。幸一は嬉しくて仕方がなかつた。子供が持てたことはもとより、その面影に母を感じたからでもあつた。目の鮮やかな二重と口角のちよつと上がった口元が、特に母を思い出させた。「見せたかつたなあ」と、幸一は心の中で呟きながら、佳恵が子供をあやすのを眺めたものであつた。

物心が付きだすと、由佳は「弟が欲しい。妹が欲しい」と言い出した。言われるまでもなく、一人息

子の幸一はその気持ちがよく理解出来た。誕生から一年が過ぎ、二年が経ち、五年が来ても、何故か身籠ることはなかった。佳恵はその頃もう高年齢出産の歳になっていた。「もう、無理ね」或る時、佳恵がぼつりと嘆声を洩らしたのを、昨日のこのように思い出すのだった。

「そろそろ、帰るよ。店を開けなくちゃね。午前中は開けて、この墓参りの時間帯だけ閉めるつて、皆に言つてあるのね」と、答える筈のない石に向つて、幸一は疲れた声でまた話かけた。辺りの木の影が伸びて、石の群れを所々覆っている。ここは過去を懐かしく愛撫する場所だと幸一は思う。ここに眠る人との接点は過去だけなのだ。あの時以来、時間の止まっている人に、過酷な言葉など投げかけられようか。

ほんの短い時間のようなのに、百合の香りがどこかへ逃げてしまった感じがした。蟬の鳴き声がもう聞こえなくなっていた。自分だけが、沈黙する石の

群れの中に、取り残され感じがした。幸一はもう一度石に向つて言葉をかけた。「今度は秋かなあ。次は由佳も一緒だから。必ず、連れてくるから」言い終えて水桶を手にとると、幸一は静寂の石に背を向けて、ゆつくり歩き出した。

いつもの時間に目覚ましが鳴った。カーテンを開けると、眩しい朝の光が射してくる。昨日帰つて、店を開けるつもりだった。だが、余熱の残る薄暗いカウスターの中に立つと、なにか草臥^{クダレ}れた感じがして、開ける気になれなかった。「偶のことだし、まあ、いいか。夏の陽射しは、やはり疲れる。歳なのかなあ」と幸一は思つてしまったのだ。「今日、そうはいかない。休めないよね」ぼそぼそと低く呟きながら、身支度を整える。ベージュの綿パンと薄い鶯色のボロシャツを着終わった。「さてと、一日のスタートですよ」言い聞かせるように、下の店に降りて行つた。幸一は狭いカウスター内を見回した。片付けは直

ぐにする性分なので、突然休んだとしても、陶磁器やポットなどは所定の場所に納まっている。「よしよし、湯を沸かし、適当な量の豆を、あの電動ミルにかけてと：」幸一はいつもの場所に立ち、昨日と同じ道具を使い、異なることのない手順を繰り返す。濁ったような音を出すミルから、馥郁とした空気の流れが漂い、辺りを包んでゆく。「これこれ、昨日も今日も変わらない香り」幸一の呟きが狭い空間に小さく響いた。



店は駅前の人通りの通る所に面していた。なにぶん、地方の都市だ。若者は都会に出て行き、他から若者が入って来る訳ではない。残された者は老いるしかなく、人の数も当然減ってくる。そんな所で、よく喫茶店が成り立っていると幸一はつくづく思う。「細々とはしていても、この界限に商店街があるからだよ、昔からの」幸一はカウンターやテーブルを

拭きつつ、そんなことを考えていると、馴染みの客たちの顔が浮んできた。

「ヒロシやシンヤ君、山本さんに近藤さん、いるよね」指折り数えながら、幼馴染や商店主の笑顔を思い浮かべた。ヒロシは同い年の六十八歳だ。高校までは同じ学校に通った。大学になって、彼は理系に進んだ。卒業後、こちらで重工業会社に就職したが、何度目かの不況で出向に出されるのを機に退職し、資産家の父親が経営していた不動産屋を継いだ。特に商才があるとは思えないが、店は潰れずにもつていた。「どうしてなんだろう、潰れないのは」幸一が冗談めかしに問うことがあった。すると、「そっちの喫茶店はどうなの。コウちゃんも、商才：、あるのかなあ」とよく混ぜ返されたものだ。『準備中』の札を持って中に入り、カウンターの隅に置いた。ちらつと、壁に架かっている時計を見ると、もう九時を回っていた。何の気なしに、後ろの棚

にある茶碗を見ていると、ドアの開く音がした。「おはよう。昨日は、昼からどうした？」低い声と共にヒロシが姿を現し、いつものカウンターの席に座った。「おはよう。墓バテかなあ。暑かったから、休んだよ。痩せてない？」幸一が悪戯つばく言うのと、「大丈夫、変わらないよ。それにしても、今年の夏は特別だわ」とヒロシが笑顔で応じた。

喫茶店はカウンターに椅子が十脚、通路を挟んで四人用のテーブルが二つあるだけの小さなものだ。今では飲物は珈琲と紅茶、それにココアを出し、食べ物も厚切りのトーストだけの、極めてシンプルなものになっていた。母と一緒にしている時は、珈琲だけで多彩なメニューが出来る程だったし、軽い食事を出していた。忙しい時は常連の人たちが、テーブルの片付けをしてくれたものだった。

二人だけになってからは、出来るだけ手間を省きたかったし、手間を掛けられもなかった。「誰かさんが、珈琲に拘るからよ。わたしに言わずと、尋

常じゃないわ」と佳恵に皮肉たつぷりの冗談を、度々言われたものだった。幸一は確かにその通りだと今になって思う。淹れ方を教えてくれた母は、それ程拘らない人だったというのに。

先ず、水に拘った。普通の水道水など、もつてのほかだった。兎に角、名水というものが欲しかった。人から聞き、資料も当たった。あちらの名水、こちらの名水を試してみた。なかなか、これというものに巡り合えなかった。「喫茶店にどうして来るのか分かる？」喋るために来るのよ。珈琲の味はそこそこで、相手するマスターのアジが加わって、良くなるのよ」というのが母の口癖だった。

若い幸一もそれは理解出来た。その通りだと思つた。だが、この拘りを棄てることは出来なかった。棄てずにいることと自分であることは、この当時、幸一にとつて、同義語であつたのだ。

『灯台下暗し』とはよく言つたものだ。いつ頃だったろう。店で何気ない会話の折に、ヒロシの亡くなつ

た親爺が「俺の所の井戸を使つてみたら」と言つてくれた。早速、その水を試してみた。ぴたりと合つたのだ。それで淹れると、強い刺激の苦味が柔らかなベルベットの舌触りに変わるのだ。程よい刺激が、舌から喉を通り、食道を女のふくよかな指で軽く撫ぜられているように流れていくのだ。それ以来水だけは、ずっと世話になり続けている。

「どうする？ 冷たいの、それとも、温かいの」と幸一が問いかけると、「いつものホットで」と返事が返ってくる。「冷たい珈琲は邪道だね。冷たさに感覚が負けて、微妙な味や香りが感じられなくなると、誰かさんが教えてくれたでしょ」ヒロシが幸一の顔を見ながら、薄らと頬に笑いを浮かべている。「良くできました。花丸ですね」幸一が混ぜ返す。「先生がよろしいもので」ヒロシも即座に応じてくる。「豆はどうする？」「いつも、同じことをお聞きになりますね。決まっているでしょ、いつものですよ」こんな会話を何年続けているのだろう。幸一は不

思議な気分と共に、何故か奇妙な幸福感をふと感じるのだった。幸一は豆を取り出し、陶器製のドリツパーに入れて、ゆつくり湯を注いでいった。

昔は豆も色とりどりに揃えていた。これも幸一の拘りだった。単一銘柄は十数種類、ブレンドは五種類以上であつただろうか。そのうち何種類かを、自分でブレンドするという凝りようだった。それが子供の誕生を境にして、徐々に少なくなつていった。佳恵が育児で店を空ける間、多種類を管理することとは無理であつた。一つ減り、二つ減りと、徐々に少なくなつていった。それでも、単一銘柄は五種類、ブレンドは細々と一種類を用意していた。

佳恵が店にもう一度立つようになつたのは、由佳が中学に通学するようになってからだつた。幸一は一人つ子の寂しさが分かつていたので、佳恵に店へ出るよう強制はしなかつたのだ。それから五、六年はあつと言う間に過ぎて行つた。その間、珈琲の種類は元に戻らなかつた。老いの門を開けようとし

ている時、『拘りが自分であること』という思いが、窮屈であるように感じられたのだ。そんな肩肘を張る必要はないと幸一は思った。それに、一度覚えた『ラクの味』は、拘りを棄てさせるほど、美味でもあった。

受けているガラスのポットに、ゆつくりと規則正しく、滴が落ちていく。栗の艶を消して、僅かに黒を混ぜたような液体が、静かに溜まっていく。頃合いを見て、幸一はポットを取り上げ、用意していた茶碗にその液体を慈しむようにそつと注いで、カウスターの上に置いた。「この茶碗、良いよね。飽きないね、いつまでも」ヒロシがいつもの台詞を、いつもの抑揚で洩らすのだった。

その茶碗は白磁に濃い藍色で、さつと幼子の絵を描いた小振りなものだ。氣取つた風もない、どこにでもあるような単純な図柄であつた。子供がなかなか出来なかつた頃、ぶらりと二人で立ち寄つた或る黨元で、見つけたものだ。「この子供、素直そう

で可愛いよね。こんな子が欲しいね」と明るく振る舞う佳恵の姿が、昨日のこのように浮かんでき

る。そんな快活で健気な佳恵の表情が変わつた時があつた。由佳が東京に行つて、帰ることがないかもしれないと……ねえ」と佳恵がふと洩らした言葉を思い出す。それまで見たこともない多少寂しげで、どこか諦めたような顔であつた。

母の死は受け入れにくいことではあつても、時間の経過とともに、順送りだと納得出来た。妻の突然な死は容易に受け入れられなかつた。痛手だつたと、今更ながらつくづく思う。覚悟の時間がないのは、どう考えても辛いものだ。一年間は何をするのも嫌だつたし、しようという気にもなれなかつた。時間とは不思議なものだ。棘のある尖つた時間の先が、心の襷ヒダを刺す毎に削られて、丸くなつて往くのだ。ふと氣付くと、この珈琲茶碗を何気なく洗

えるようになっていた。何十とある他の茶碗と特別に区別することもなくなっていた。忘れたわけでは決していない。心のその部分に触れたとしても、棘の丸くなった時間では、痛みを感じないのだ。有難くもあり、哀しくもあつた。

ヒロシは茶碗を口に運んだ。喉仏が小さく動くのが見えた。一口飲んで、無地の白い皿にそれをゆつくり置いた。微かな音が幸一の耳に届いた。

「行つたのか、昨日。ユカちゃんも一緒に……、だろう」静かな口調だが、聞いて欲しくない質問が幸一に向つて飛んだ。「一人だよ。昨日、言つただろう。昼から一人で行くつて」「冗談だと思つていた。お参りまでには、ユカちゃんが帰つて来るものと、てつきり思つていたよ」ヒロシが意外そうに呟いて、正面の幸一を見ている。カウンターの upper を意味もなく拭きながら、幸一は口を開いた。

「もう、いい歳だから、こちらの思うようにはならないよ」どこことなく諦めたような、それでいて、多少

の願望も混ざつた表情で幸一は答えた。「そんなことを言つてないで、珈琲を飲んでちょうだい」質問をはぐらかすように、ちよつとお道化て、幸一は語尾に力を込めた。ヒロシはまた茶碗を口に運び、幸一を見つめた。「三十だろう」「そうだよ」「恋人の一人もいるよなあ」「どうだろう?」「そんな話、しないのか」「別に。その気になれば、言うだろうし」「父親じやなあ。やつぱり必要だね、母親は。子供が幾つになつても」「そうかなあ」「いるよ、絶対にいる」ヒロシは絶対という言葉に力を込めている。言われるまでもなく、子供に母親が必要なのは至極当然のことだ。父親に言えないことでも、母親には言えることがあるものだ。

何気なく装つていても、幸一は気になつていた。華やかな都会での独り暮らしだ。言い寄る男も多いだろう。いくら仕事が好きだとはいえ、もう三十にもなつてゐる。成熟した女だ。男の一人くらいあつても不思議ではない。そう理解していても、気持ちの

上で独りを望んでいる、親爺の妙な感覚を持っていた。偶の帰省時でも、そんな話は避け、身体のことや仕事のこと、そんな世間話ばかりをしていた。「あいつがいたらなあ」と、幸一はそんな溜息をよく洩らしたものであった。

二人の会話がちよつと途切れた。ぎこちない時間が二人の間を流れた。ほんの何秒間であつても、持て余してしまうような時間だ。ヒロシは珈琲を口にしつつ、幸一の後ろにある棚をぼんやり眺めている。棚には買い集めた珈琲茶碗が、一つずつ小さく区切ったスペースに置かれている。四・五十客はあるだろうか。別にそれが目に入っている風ではない。不意に着信音が鳴った。それは幸一のガラケイからであった。

「ちよつと、なあ」と、ヒロシに声をかけながら、幸一は徐にそれを開いた。由佳からのメールだった。『ゴメンね(O)』 来週末に帰るわ。いろいろ話したい事があつて……。電話じゃ、言えないので。顔を見て

からね『何だろうと、多少訝しく思いながら、幸一はそのメールをヒロシに見せた。』「拝見いたしましたよ」ヒロシが茶碗を持ちながら、冗談めかしの慇懃さで、その画面を覗き込んだ。

「何でしようね、話つて。ひよつとして、あの、ふふ。じゃ、そろそろ、帰るわ」ヒロシが目の周りに微笑みを浮かべて、残りの珈琲を飲干し、席を立った。幸一はとても小さな針で、ちくりと刺されたような気がした。別に痛くはない。血が滲んでいるわけでもない。赤い刺しあとが、心の中で波紋のように小さく、だが確実に広がっていくのだ。「聞けば、分かる」と、幸一は呟きながら、ヒロシの空けた茶碗を取り上げた。藍色をした子供の輪郭が、何故かぼかしたように滲んでいた。

風詠社文庫 [自選童話集]

一本50,000円

天然知能水

石川希理著

平成26年7月7日 風詠社発行 648円＋税

ISBN 978-4-434-19464-1 C0093

お近くの書店からご注文下さい。

※ネットの「アマゾン」・「紀伊國屋」・「7ネット」などでも入手可。

収録作選評(抄)「そばづえ」メルヘンとしては珍しいS・Fタッチのもので、星新一の系統に属するものです。このまま、短篇漫画のストーリーになりそうですが、人間の未来を予見するようなどころもあり、まだぼくらはいろんな意味で「そばづえ」をくうことが多いので、身につまされる現実感がある。

漫画家 やなせ・たかし

コシーナ文庫 [短編小説集]

エスプラネード

石川希理著

平成25年12月1日 コシーナブックス 645円＋税

ISBN 978-4-904620-15-1 C0193

ネットの「アマゾン」からご注文下さい。

[エスプラネード]

独特の設定、構成で描かれた巧みな作品だ。短編小説は主人公の視点で書くのが常道だが、軽い認知症を疑われる主人公「私」は、意図的ではあるが、容易に昔の憎き上司の視点に変わったりもできる。

自宅から約4キロにわたる、過去にまつわるエスプラネード(遊歩道)で回想にふけり、亡くなったはずの妻が時々現れて会話を交わすなど、多様な幻影を見ながら何かおかしいと思いつつ歩く。その道は(ま、しゃあないか)と生きた私の、人生のエスプラネードでもあるという。そして意外な結末で終わる一。諦めを感じる人生をセミドキュメンタリー風の手法で描いた秀逸な作品だ。

野元正・作家

[神戸新聞書評・2013年3月30日]

◆ 受贈誌などの紹介

● ご惠贈ありがとうございました。

● アクトス会員の皆さまには、閲覧希望がありましたら編集室までご連絡下さい。

①『半どん』 164号 芸術文化団体 半どんの会 2015/6/30発行

〒673-0841 明石市太寺天王町4-2 野元正様方

②『海馬38号』 海馬文学会 事務局 〒659-0053 芦屋市松浜町5-17-712 小坂忠弘様方

③『明石大門』35号 明石ペンクラブ 〒673-0883 明石市中崎二丁目4-1-402 山中幸義様方

終刊号

■ おしらせ

① 例会は原則2時から4時まで（延長しても5時まで）とします。

② 原稿締めきりは、2/5/8/11月末日です。締め切り月、ひと月の間に送信下さい。

③ HPの掲示板に例会報告を載せております。



悲哀

明花

そもそも僕の存在価値はどの程度のものなのか。

僕は、右手の中指。いわゆる右手のお兄さん指だ。

指は、右手と左手それぞれ五本ずつ。親指は怪我をしても保証は高いという噂だ。それはグーをしても力が入れられないからだ。人さし指は、方向を指したり自分を指して鼻の上に登場するし、一方で「人を指差してはいけません」と注意される指でもある。

薬指は色つぼく口紅をつけてみたりソフトなタッチが必要な

時は活躍する。しかも左手の薬指はダイヤの指輪などで装飾される。小指は約束、指切りげんまんには欠かせない。で、中指の僕は、いつたいどんなところで活躍しているというのだろう、

ところで、僕のご主人さまの指のデザインは、細長く華奢にできている。指輪のサイズは左の薬指で八号というから周囲十五・四ミリ。細い方に分類される。力仕事には不向きな手だが、年齢を重ね主婦歴三十年も経過をすると節が立つて、作業量の多い右手はどんどん大きくなつていく。右手と左手を並べるとずいぶんと違つて見える。

そして最近、僕はどんどん節

くれだつて、ある朝、第二関節に激痛が襲つてきた。

「う、イタタ。もしかしてこの腫れと痛みは関節リウマチ？」ちよつと呑気者のご主人が不安に駆られて、接骨院に駆け込んだ。普段、体のメンテナンスに通っている接骨院で何でも相談しやすいのだ。

「ここ、痛い？」先生が、中指の付け根一センチほど下を押さえて指の曲げ伸ばしを指示してきた。「ものすごく、痛いです」とご主人は顔をしかめている。「腱鞘炎ですね。使い痛み。とりあえずテーピングしておきます」「中指の使い過ぎですか？ 中指つてそんなに使っていますか？」と

僕の働きを歯牙にもかけない暴言を吐いて、テーピングの処置を受けていた。

「僕ってそんなに存在感ないのか」激しいシヨックが襲ってくる。こうなったら、僕の存在感をアピールしてやる。

「う、痛」

まずはペットボトルキャップを外すタイミングで、僕は悲鳴を上げてみた。キャップをネジっているのは、僕の仕事だ。第二関節が外向きに動くたびにズキリと痛む。

「う、イタタ」

ご主人は車のウインカーを出すとき、一番長い指の僕を使っている。運転のときのクセなの

だ。右に出すときは僕一本が。左のときは中指、薬指の二本を使うがメイン動作は僕だ。

「おー、痛た」

ご主人お氣に入りの陶器のマグカップ。なみなみとコーヒーが入っているカップの柄に指をかけているのは人差し指だが、重み全体を支えているのは中指の僕だ。やはりここでも第二関節が外向きに広がる。きついなあ、この仕事。でも最近、ようやく僕の悲鳴に気がついて、湯呑を持つように指全体でカップを持つように仕事はシフトされてきた。やれやれ、だ。

スマホの画面タッチも僕の仕事だし、鉛筆を支えているのも

僕だ。やつぱり僕は思いのほかの働き者なのだ。

痛みのストライキを決行したおかげで、めでたく僕の働きに気がついてもらえるようになった。時にはテーピングで予防をし、夜にはマッサージを施され、痛み止めの湿布を貼ってもらえるようになったのだ。

でも実はもう一つ、気がついて欲しいことがある。それは加齢ということだ。皆まで言うまい。





◆ 中高年齢労働者福祉センター
(サンライフ明石)

〒673-0041 明石市西明石南町3丁目1-21

電話078-923-0770

- ◆ 合評会(例会)は、中高年齢労働者福祉センター(サンライフ明石)(上図・所在、連絡先)です。奇数月・第3土曜日、2時からの予定です。改めてご連絡しませんので、参加される場合は手帖などにお控え下さい。
- 出欠のご連絡は不要です。

編集室から

◆次号（第29号）の原稿締切は11月末日必着です。

◆9月例会は19（土）です。

◆11月例会は21（土）です。

第3土曜です。14時から2時間程度です。

◆例会後、参加可能の方は懇親会において下さい。

◆HPに、28号までを、PDFファイルで掲載しました。URLは次のとおりです。

<http://actus2008.0.007.jp/>

（ネット検索の窓から「文芸 □ アクトス」といれて探されても出てきま

す。□はスペース）

◆暑い夏は、文字通り酷暑でした。年々歳々ジリジリと暑さは増してきているようです。

忠臣蔵に見られる東京の雪は、もう二度と目にすることはないのでしょうか。

単なる地球の周期的な気候変動なのか、それとも人間の活動によるものなのか、科学的には判然としないうちです。

といつても、温暖化は進行しつつあります。海流が変化し、暖かい海の生物が北上します。セアカゴケモとか、有り難くない熱帯・亜熱帯の病が押し寄せます。作物も含め生物の北限がどんどんせり上がりま

す。北極の水はどんどん溶けて、資源争奪や航路開発競争が目前です。

もう人間の生存は僅かな期間しか許されていないのかも知れませんが、そんなことを考えながらも、今日もパソコン前です。沢山の作品をありがとうございます。

◆表紙は、秋の写真です。

ソフトウェアが無料で提供しているものです。裏表紙はすっかり口に入らなくなつたものです。半世紀くらい前までは豊富に食卓にのぼつたものでした。反対にバナナやタマゴなんていうものは、半世紀前はなかなか口に出来なかつたものです。

〔亥〕

■入会下さい。ネット・デジタルで執筆です。

◆入会するには◆

- ①会費1年分(12,000円)を下の振込先に振り込み
- ②〒住所・氏名(フリガナ)・生年月日・職業・電話・メールを明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可

〒673-0031 明石市宮の上1の17の614
大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

※読書会員の場合 年会費は2,400円です。

※会員・読書会員とも年4回、各1冊お届けします。(送料含む)

◆会費等振込先(郵便・当座)◆

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※会費以外に発表負担金などは不要です。

アクトス 第28号

第7巻第4号・通巻第33号

発行 平成二十七年十一月一日

編集 大西亥一郎

発行所

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品(頒価)800円